

『中観心論』第3章の研究 (1)*

田村昌己

はじめに

本研究は、中観派の学匠バーヴィヴェーカ (Bhāviveka, ca. 490–570) の主著『中観心論』 (*Madhyamakahrdayakārikā*) 第3章「真実知の探究」(Tattvajñānaiṣaṇā) 章とそれに対する注釈書『思釈炎』(*Tarkajvālā*) のテキスト校訂及び和訳研究を試みるものである。

バーヴィヴェーカは『中観心論』冒頭箇所(第1章第5偈)において、(1) 菩提心を捨てないこと (bodhicittāparityāga)、(2) 牟尼の誓戒に依拠すること (munivratasamāśraya)、(3) 真実知を探究すること (tattvajñānaiṣaṇā) の三つを、あらゆる目的を実現するための行 (sarvārthasiddhaye caryā) として提示する*1。『中観心論』は全11章のうち第3章までが先行成立したと考えられているが*2、その先行成立時の『中観心論』全体の要約がここに提示されており、これら三つが順に第1章、第2章、第3章の主題(そして章題)となっている。

本研究が扱う第3章(全360偈)は、「真実知の探究」を主題として、二諦説や無自性論証、仏陀論など、バーヴィヴェーカの中観思想が余すことなく披歴されており、『中観心論』全11章の中で一番の核となる章である。その冒頭第1偈から第13偈にかけては、「真実知の探究」に誘う導入として、智慧について論じられる。その構成を大まかに示せば、以下の通りである。

* 筆者は、2019年度に桂紹隆先生が主催された「清弁研究会」(JSPS 科研費 JP18K00069 のプロジェクトとして龍谷大学にて全8回実施)に参加する機会を得た。研究会では、桂先生と西山亮氏を中心に、『中観心論』第3章第1偈から第25偈を通読した後、第26偈を注釈書『思釈炎』とともに精読した。筆者はかつて修士論文において同章第1偈から第44偈までを扱ったことがあったが、研究会への参加を通じて多くの新たな知見を得ることができた。本稿においても研究会の成果が反映されている。桂先生、西山氏、そして参加者の方々に感謝する次第である。また本稿の執筆にあたり、稲見正浩先生と根本裕史先生から有益なコメントを頂戴した。本研究は JSPS 科研費 JP19J01490 及び JP21K12839 の助成を受けたものである。

*1 MHK 1.5: bodhicittāparityāgo munivratasamāśrayaḥ / tattvajñānaiṣaṇā ceti caryā sarvārthasiddhaye // (テキストはLに基づく。)

*2 『中観心論』の成立過程については、斎藤 2005 を参照されたい。

- 0. 導入：智慧について
- 0.1. 智慧の重要性 (vv. 1-5)
- 0.2. 智慧の役割 (v. 6)
- 0.3. 二種の智慧 (vv. 7-13)

このうち、本稿では「0.1. 智慧の重要性」を取り上げ、『中観心論』及び『思釈炎』のテキスト校訂と和訳研究を提示する。以下、それに先立ち、必要な情報を記しておこう。

テキスト

『中観心論』(MHK) サンスクリット

写本 (Ms)、Sāṅkrtyāyana/Gokhale 書写ノート (SG)、校訂テキスト (E, I, L, H₁, H₂, S) が利用可能である。

- Ms 蔣忠新 1991 「梵文《思釈焔經》抄本影印版・編者的話」『季羨林教授八十華紀記念論文集 上』(江西人民出版社) : 111-117, 511-522.
- SG Bahulkar, Shrikant S. 1994. “The *Madhyamaka-Hṛdaya-Kārikā* of Bhāvaviveka: A Photographic Reproduction of Prof. V.V. Gokhale’s Copy,” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 15: 1-49.
- E 江島 恵教 1980 『中観思想の研究』春秋社.
- I Iida, Shōtarō. 1980. *Reason and Emptiness: A Study in Logic and Mysticism*. Tokyo: Hokuseido Press.
- L Lindtner, Chr. 2001. *Madhyamakahrdayam of Bhavya*. Chennai: Adyar Library and Research Centre.
- H₁ Heitmann, Annette L. 2004. *Nektar der Erkenntnis: Buddhistische Philosophie des 6. Jh: Bhavyas Tarkajvālā I-III. 26*. Aachen: Shaker Verlag.
- H₂ Heitmann, Annette L. 2009. *Textedition und -kritik von Bhavyas Madhyamakahrdaya-kārikā I-III*. Hamburg: Verlag Dr. Kovač.
- S Saitō, Akira. 2020. “Bhāviveka on *prajñā*.” In *Archaeologies of the Written: Indian, Tibetan, and Buddhist Studies in Honour of Cristina Scherrer-Schaub*, ed. V. Tournier et al., 517-525. Napoli: Università degli Studi di Napoli “L’Orientale.”

『中観心論』(MHK) チベット語訳

チベット大蔵経各版について、今回扱う箇所のリケーションとともに示す。なお、上記の E、I、H₁ においても『中観心論』チベット語訳のテキスト校訂がなされている。

MD デルゲ版 dza 3b5-4a1.

- MP 北京版 dza 4a5–8.
 MC チョーネ版 dza 3b5–4a1.
 MN ナルタン版 dza 5a2–4.
 MG 金写版 dza 5a3–6.

『思釈炎』(TJ)

チベット大蔵経各版について、今回扱う箇所のリケーションとともに示す。なお、上記の I 及び H₁ においても『思釈炎』のテキスト校訂がなされている。

- D/(TD) デルゲ版 dza 53b2–54b4.
 P/(TP) 北京版 dza 57a1–58a3.
 C/(TC) チョーネ版 dza 53b2–54b3.
 N/(TN) ナルタン版 dza 53a7–54b2.
 G/(TG) 金写版 dza 73a3–74b4.

先行訳

本稿が扱う箇所を含むものとして以下のものがある。

- 野沢 1954 野沢静証「清辨造『中論学心髓の疏・思釈炎』「真如智を求むる」章第三 (I)」『密教文化』28: 1(53)–8(46).
 江島 1980 上記 E.
 Iida 1980 上記 I.
 Eckel 1992 Eckel, Malcolm David. *To See the Buddha: A Philosopher's Quest for the Meaning of Emptiness*. Princeton: Princeton University Press.
 Heitmann 2004 上記 H₁.
 Eckel 2016 Eckel, Malcolm David. “Two Truths and the Structure of the Bodhisattva Path in “The Introduction to the Nectar of Reality”.” 『インド学チベット学研究』20: 140–165.
 Saitō 2017 Saitō, Akira. “Bhāviveka’s Concept of *Prajñā* in the Context of the Two Truths.” 『仏教文化研究論集』18/19: 47–58.
 Saitō 2020 上記 S.

このうち、江島 1980、Eckel 1992、2016、Saitō 2017、2020 は『中観心論』のみの翻訳である。また野沢 1954 は『中観心論』サンスクリット未見（チベット語訳からの翻訳）である。

凡例

テキスト部分

校訂サンスクリットテキストは、写本 (Ms)、Sāṅkṛtyāyana/Gokhale 書写ノート (SG)、校訂テキスト (E, I, L, H₁, H₂, S)、チベット語訳 (MD, MP, MC, MN, MG)、『思釈炎』(TD, TP, TC, TN, TG) 等の資料に基づいて作成する。テキストに異読がある場合、その箇所すべての情報を注記する。ただし、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハやダング等の有無などについては注記しない。異読の表記は、セミコロン (;) で区切り、その前に採用した読みを、後には採用しなかった読みを提示する。対応するテキストがない場合は、n.e. (no equivalent) と注記する。サンスクリットの読みが写本 (Ms) に根拠がなく、チベット語訳等から想定されたものである場合は、テキスト本文の該当箇所をイタリック体で示す。想定した読みが既存校訂テキストが提案したものでない場合は、corr. (corrected) と注記する。注記におけるチベット語訳 (Tib.) の情報は、採用した読みをチベット語訳 (Tib.) が支持する場合はセミコロンの前の語に続けて、採用しなかった読みを支持する場合はセミコロンの後の語に続けて () で提示する。いずれも支持しない場合は、コンマで区切り () で示す。

校訂チベット語テキストは、上記のチベット大蔵経各版 (MD, MP, MC, MN, MG 及び TD, TP, TC, TN, TG) に基づいて作成する。その際、上述の既存校訂テキスト (『中観心論』: E・I・H₁、『思釈炎』: I・H₁) を適宜参照する。テキストに異読がある場合、その箇所に注記を付す。ただし、既存校訂テキストとの異同、分節記号の挿入・削除、pa と ba の異読等、明らかな誤植等については注記しない。異読の表記は、セミコロン (;) で区切り、その前に採用した読みを、後には採用しなかった読みを提示する。『思釈炎』のテキストにおいて、『中観心論』偈頌の引用や説明中の偈頌の語はボールド体で示す。

和訳部分

上記の校訂テキストに基づいた和訳を提示する。() は言い換えや原語の提示、[] は補足を意味する。『思釈炎』の和訳において、『中観心論』偈頌の引用や説明中の偈頌の語は、ボールド体で示し、基本的にはサンスクリットからの翻訳を提示する。

シノプシス

本稿が扱う箇所のシノプシスは以下の通りである。

- 0. 導入：智慧について
 - 0.1. 智慧の重要性
 - 0.1.1 智慧を本質とする眼を持つ者こそが真に眼を持つ者である (v. 1)
 - 0.1.1.1. 説明 (1) (v. 2)

0.1.1.2. 説明 (2) (v. 3)

0.1.2. 智慧を本質とする眼を持つ者の行い (vv. 4-5)

『中観心論』第3章「真実知の探究」(Tattvajñānaiṣaṇā)

0. 導入：智慧について

0.1. 智慧の重要性

0.1.1. 智慧を本質とする眼を持つ者こそが真に眼を持つ者である

MHK 3.1 [Ms2a4–5]

yasya jñānamayaṃ cakṣuś cakṣus¹ tasyāsti netarat /
yatas tasmād bhaved dhīmāṃs tattvajñānaiṣaṇāparaḥ //

MHK 3.1 [MD dza 3b5–6, MP dza 4a5–6, MC dza 3b5–6, MN dza 5a2, MG dza 5a3,
TD53b3, TP57a1–2, TC53b2–3, TN53b1, TG73a4]

gang la shes pa'i mig yod pa //
de la mig yod gzhan ma yin //
des na gang phyir blo ldan dag //
de nyid shes pa 'tshol¹⁾ la²⁾ brtson //

智慧を本質とする眼(jñānamayaṃ cakṣuḥ)⁽¹⁾を持つ者〔こそ〕が〔真に〕眼を持つ者なのであって、それ以外〔の眼を持つ者はそうでは〕ない。それゆえ、賢者(dhīmat)であれば、当然、真実知(tattvajñāna)の探究に専念する者となる⁽²⁾。

¹cakṣuś cakṣus E, L, H₁, H₂, S (gang la shes pa'i mig yod pa // de la mig yod ... Tib.); cakṣuś(sic) cakṣus I, cakṣuś ca(kṣu?)s SG, ca+++[2a5]s Ms.

¹⁾tshol MP, MN, MG, TP, TN, TG; tshol MD, MC, TD, TC.

²⁾la TD, TP, TC, TN, TG; ba MD, MP, MC, MN, MG.

⁽¹⁾TJはjñānamayaを「智慧を本質とするもの」(shes pa'i ngo bo nyid, *jñānasvabhāva)と説明しており、ここではそれに従って翻訳した。チベット語訳はshes pa'i mig(「智慧という眼/智慧の眼」となっているが、これは元々の原文が異なるというよりも、ここで述べたようなjñānamayaの意味を考慮した上でそのように翻訳したのであろう。

⁽²⁾Iida 1980, Eckel 1992, 2016, Heitmann 2004, Saitō 2017, 2020はab句をcd句の理由と理解する。一方、江島1980はcd句をab句の理由と理解し、「知眼あるものこそ真に眼あるものにほかならない。それによって真実知の探究(tattvajñānaiṣaṇā)に専念するものが知者といえるからである」と翻訳する。「それによって」とは文脈上、「知眼によって」ということであろう。しかし、ここで言う「知眼」(智慧を本質とする眼)は真実知に他ならないから、江島の解釈は不合理である。ここでの主題は真実知の探究であることを踏まえれば、それを含むcd句はab句から導かれる帰結であると解釈すべきであろう。なおyatas tasmādに対応するチベット語訳はdes na gang phyirとなっている。チベット語訳者は江島と同様の読み方をした結果、あえてこの語順で翻訳したのかもしれない。gang phyir des naとすれば本稿のように理解されるからである。(チベット語訳からの翻訳である野沢1954は「智眼あるものこそ眼を有す。他は然らず。これに由つて、具慧者は真如智を求むることに努力する」と訳出する。)

0.1.1.1. 説明 (1)

MHK 3.2 [Ms2a5]²

paśyaty andho³ 'pi matimān viprakṣṭān didṛkṣitān⁴ /
 sūkṣmavyavahitān arthāṃs trailokyāhatadarśanaḥ⁵ //

MHK 3.2 [MD3b6, MP4a6, MC3b6, MN5a2–3, MG5a3–4, TD53b6, TP57a5, TC53b5–6,
 TN53b4, TG73b1–2]

blo ldan 'jig rten gsum po dag //
 thogs³⁾ med mthong ba long bas kyang //
 blta 'dod thag ring cha phra⁴⁾ dang //
 bsgribs pa'i don yang mthong bar 'gyur //

智慧ある者 (matimat)⁽³⁾ は、三界を妨げられることなく見るので、たとえ盲目であつても、見たいと望んだ、遠くの対象・微細な対象・隠れた対象を見る。

²以下の第2偈と第3偈はチベット語訳及び TJ が与える順序に従っている (Ms では順序が逆になっている)。これら2つの偈頌は、第1偈 ab 句の内容、すなわち (1)「智慧を本質とする眼を持つ者が真に眼を持つ者であること」と (2)「それ以外の眼を持つ者 (=智慧を本質とする眼を持たない者) は真に眼を持つ者ではないこと」を説明していることを考慮すれば、その順序は (1) (2) の順で説明を与えるチベット語訳及び TJ のものが適切であろう。

³andho E, I, L, H₁, H₂, S (long bas Tib.); ako?(andho [Tib.]) SG, arko Ms.

⁴viprakṣṭān didṛkṣitān corr. (blta 'dod thag ring ... don Tib.); didṛkṣur viprakṣṭakān L, S, didṛkṣuviprakṣṭakān E, H₁, H₂, SG, didṛkṣur viprakṣṭakān I, n.e. Ms. b 句は Ms では欠落しており、チベット語訳から想定する必要がある。E, H₁, H₂, SG 及び I の想定は韻律の点から不適当であるが、L, S の想定は韻律的にも文法的にも可能である。しかし、(1) チベット語訳及び TJ の blta 'dod (blta bar 'dod pa) は「智慧ある者」(blo ldan) と同格だとも見做せなくもないが、むしろ「見たいと望んだ... 対象」(blta bar 'dod pa ... don) というように、「対象」(don) を修飾していると解釈されること、また (2) 偈頌の形としても、b 句冒頭の一語のみが matimān と同格の語であるよりも、bc 句全体で智慧ある者が見ることのできる対象を述べている方がより自然であることを踏まえて、ここでは viprakṣṭān didṛkṣitān という読みを提案する。現在その存在が報告されている紙写本 (Ye 2009: 317–318) から当該箇所が回収されることを期待したい。

⁵trailokyā- E, I, L, S ('jig rten gsum po dag Tib.); traikālyā- H₁, H₂, SG, Ms. 智慧ある者が見ることのできる対象として具体的に挙げられるのは「遠くの対象・微細な対象・隠れた対象」である。これは時間的な区分に関係したものではないから、チベット語訳から想定される trailokyā- という読みを採用する。

³⁾thogs MD, MC, TD, TP, TC, TN, TG; thog MP, MN, MG.

⁴⁾phra MD, MC, TD, TP, TC, TN, TG; 'phra MP, MN, MG.

⁽³⁾TJ も説明するように、ここで言う mati は、智慧を本質とする眼 (jñānamayaṃ cakṣuḥ)、すなわち真実知 (tattvajñāna) を指している (後続の第3偈の buddhi も同様である)。先行研究では注意が払われていないが、第1偈の dhīmat と目下の matimat はその意味するところが異なる。すなわち、前者は「賢者」「知者」という程度の意味であるが、後者は特に「智慧を本質とする眼を持つ者」「真実知を持つ者」を意味する。

0.1.1.2. 説明(2)

MHK 3.3 [Ms2a5]
 sahasreṇāpi netrāṇām anetro buddhivarjitaḥ /
 svargāpavargasadbhūtamārgāmārgāsamīkṣaṇāt //

MHK 3.3 [MD3b6–7, MP4a6–7, MC3b6–7, MN5a3, MG5a4, TD53b7–54a1, TP57a7, TC53b7, TN53b6, TG73b3–4]
 mig stong pa yang blo med na //
 mig dang ldan pa ma yin te //
 mtho ris dang ni byang grol gyi //
 lam dang lam min mi mthong phyir //

[インドラ神は、]千の眼があっても、智慧(buddhi)⁽⁴⁾を欠くので、眼のない者である。なぜなら[智慧を欠く者は]天界(svarga)と解脱(apavarga)への正しい道と正しくない道とを正しく見極めないからである⁽⁵⁾。

0.1.2. 智慧を本質とする眼を持つ者の行い

MHK 3.4 [Ms2a5]
 dr̥ṣṭādr̥ṣṭaviśiṣṭeṣṭaphalāśāviśakṣaṇtake⁶ /
 pravartate na dānādaḥ prajñonmīlitalocanaḥ⁷ //

MHK 3.4 [MD3b7, MP4a7, MC3b7, MN5a3–4, MG5a4–5, TD54a3, TP57b1–2, TC54a2, TN54a1, TG73b6–74a1]
 shes rab mig bye⁵ mthong ba dang //
 ma mthong khyad par 'dod pa yi //
 'bras bu re ba dug tsher gyi //
 sbyin pa sogs la 'jug mi byed //

⁶-viśiṣṭeṣṭaphalā- E, L, H₁, H₂, S, SG, Ms (khyad par 'dod pa yi // 'bras bu ... Tib.); -[viśi(sic)]ṣṭeṣu phalā- I.

⁷-locanaḥ E, I, L, H₁, H₂, S, SG; loca+ Ms.

⁵bye MD, MP, MC, MN, MG (shes rab kyi mig bye ba ... TJ); phyé TD, TP, TC, TN, TG.

⁽⁴⁾前注でも指摘したように、ここで言う buddhi は、先の mati と同様、智慧を本質とする眼(jñānamayaṃ cakṣuḥ)、すなわち真実知(tattvajñāna)を指している。TJ もそのように説明している。

⁽⁵⁾チベット語訳は「なぜなら天界と解脱への道と道ならざるものを見極めないから」(mtho ris dang ni byang grol gyi // lam dang lam min mi mthong phyir //)となっており、sadbhūta に相当する訳語を欠く。これについては TJ も説明を与えていない。内容を考慮して特に翻訳しなかったのだろうか。

智慧によって開かれた眼を持つ者 (prajñonmīlitalocana)⁶⁾ は、〔現世で〕経験される果報・〔現世では〕経験されない果報・すぐれた果報・望ましい果報への望みという毒や棘を有する布施等に向けて活動を起こさない。

MHK 3.5 [Ms2a6]

trimaṇḍalaviśuddhe hi dānādāv abhiyujyate /
kāruṇyāt sarvavittvāya tatrāpy asthitamānaṣaḥ //

MHK 3.5 [MD3b7–4a1, MP4a8, MC3b7–4a1, MN5a4, MG5a5–6, TD54a6–7, TP57b5–6, TC54a5–6, TN54a4–5, TG74a4]

snying rjes⁶⁾ thams cad mkhyen pa'i phyir⁷⁾ //
'khor gsum yongs su dag pa yi //
sbyin la sogs la brtson⁸⁾ byed cing //
de la'ang yid ni gnas mi byed //

実に、〔智慧によって開かれた眼を持つ者は、〕あわれみ故に、一切智者性〔の獲得〕のために三輪清浄なる布施等に努力する。しかもそれ（一切智者性）にも心はとどまらない。

⁶⁾rjes MD, MP, MC, MN, MG, TD, TC; rje TP, TN, TG.

⁷⁾phyir MD, MP, MC, MN, MG, TD, TC; phyir ro TP, TN, TG.

⁸⁾brtson MD, MC, TD, TP, TC, TN, TG; rtson MP, MN, MG.

⁶⁾prajñonmīlitalocana について、チベット語訳及び TJ では shes rab mig bye/shes rab kyi mig bye となっており、「智慧という開かれた眼を持つ者」あるいは「智慧という眼が開かれた者」という意味で理解されている。prajñonmīlitalocana は第 1 偈の「智慧を本質とする眼」(jñānamayaṃ cakṣuḥ) に対応している。智慧があることによって、眼は真の意味での眼となり、見ることができる。そのことがここで「智慧によって開かれた眼」と述べられている。もちろんそのような眼は結局は智慧そのものである。

『思釈炎』第3章「真実知の探究」(Tattvajñānaiṣaṇā)

0. 導入：智慧について

0.1. 智慧の重要性

0.1.1. 智慧を本質とする眼を持つ者こそが真に眼を持つ者である

[D dza 53b2–3, P dza 57a1–2, C dza 53b2–3, N dza 53a7–b1, G dza 73a3–4]

da ni de nyid shes pa 'tshol⁹⁾ ba'i skabs su bab pas de bstan pa'i phyir le'u gsum pa brtsam pa'i dbang du byas nas /

MHK 3.1 [MD dza 3b5–6, MP dza 4a5–6, MC dza 3b5–6, MN dza 5a2, MG dza 5a3, TD53b3, TP57a1–2, TC53b2–3, TN53b1, TG73a4]

gang la shes pa'i mig yod pa //

de la mig yod gzhan ma yin //

des na gang phyir blo ldan dag //

de nyid shes pa 'tshol¹⁰⁾ la¹¹⁾ brtson //

zhes bya ba la sogs pa smras te /

さて今度は、真実知を探究すること (de nyid shes pa 'tshol ba, *tattvajñānaiṣaṇā) が議論の主題であるから、〔バーヴィヴェーカは〕それを説明するために第3章の開始に関連して、

智慧を本質とする眼 (jñānamayaṃ cakṣuḥ) を持つ者〔こそ〕が〔真に〕眼を持つ者なのであって、それ以外〔の眼を持つ者はそうでは〕ない。それゆえ、賢者 (dhīmat) であれば、当然、真実知 (tattvajñāna) の探究に専念する者となる。

云々と述べる。

[D53b3–6, P57a2–5, C53b3–5, N53b1–4, G73a4–b1]

shes pa'i ngo bo nyid ni mig yin te / 'das pa dang / ma 'ongs pa dang / da ltar dang / thag ring ba dang / nye ba dang / rags pa dang / cha phra ba'i¹²⁾ dngos po dag la thogs pa med par 'jug pa'i phyir ro // **gang la shes pa'i mig de yod pa de la ni mig yod pa yin no //** **gzhan ma yin** zhes bya ba ni sha'i mig ni ha cang nye ba dang ring ba dang dbang po las 'das pa la sogs pa'i dngos po dag

⁹⁾tshol P, N, G; tshol D, C.

¹⁰⁾tshol MP, MN, MG, TP, TN, TG; tshol MD, MC, TD, TC.

¹¹⁾la TD, TP, TC, TN, TG; ba MD, MP, MC, MN, MG.

¹²⁾cha phra ba'i D, C; phra ba'i P, N, G.

la long ba dang¹³⁾ 'dra bas de yod du zin kyang ci la yang mi phan pas de yod kyang mig dang
ldan pa ma yin no // **des na gang gi phyir blo dang ldan pa dag ni sha'i mig ngan pa de 'tshol¹⁴⁾**
ba spangs te / **de nyid shes pa 'tshol¹⁵⁾** ba la brtson par byed do //

智慧を本質とするもの (shes pa'i ngo bo nyid, *jñānasvabhāva) が眼である。なぜなら〔智慧は、〕過去〔の諸事物〕・未来〔の諸事物〕・現在〔の諸事物〕・遠く〔の諸事物〕・近く〔の諸事物〕・粗大〔な諸事物〕・微細な諸事物に対して、妨げられることなく働きかけるからである。そのような智慧を本質とする眼を持つ者〔こそ〕が〔真に〕眼を持つ者である。「それ以外〔の眼を持つ者はそうでは〕ない (netarat)」について。肉眼は非常に近く〔の諸事物〕・遠く〔の諸事物〕・知覚範囲を超えた〔諸事物〕等の諸事物に対しては盲目も同然であるから、それ(肉眼)を持っていたとしても〔本当は〕何に対しても無益である。それゆえ、それ(肉眼)を持っていても眼を持つ者ではない。それゆえ、賢者はそのような劣った肉眼を求めることを放棄し、真実知を探究することに専念する。

0.1.1.1 説明 (1)

[D53b6, P57a5, C53b5–6, N53b4, G73b1–2]

don de nyid bstan pa'i phyir

MHK 3.2 [MD3b6, MP4a6, MC3b6, MN5a2–3, MG5a3–4, TD53b6, TP57a5, TC53b5–6, TN53b4, TG73b1–2]

blo ldan 'jig rten gsum po dag //

thogs¹⁶⁾ med mthong ba long bas kyang //

blta 'dod thag ring cha phra¹⁷⁾ dang //

bsgribs pa'i don yang mthong bar 'gyur //

zhes bya ba smras te /

まさにその意味を説明するために、〔パーヴィヴェーカは〕

智慧ある者 (matimat) は、三界を妨げられることなく見るので、たとえ盲目であっても、見たいと望んだ、遠くの対象・微細な対象・隠れた対象を見る。

と述べる。

¹³⁾dang P, N, G; n.e. D, C.

¹⁴⁾'tshol P, N, G; tshol D, C.

¹⁵⁾'tshol P, N, G; tshol D, C.

¹⁶⁾thogs MD, MC, TD, TP, TC, TN, TG; thog MP, MN, MG.

¹⁷⁾phra MD, MC, TD, TP, TC, TN, TG; 'phra MP, MN, MG.

[D53b6–7, P57a5–7, C53b6–7, N53b4–5, G73b2–3]

shes pa'i mig gi **blo dang ldan** pa 'jig rten gsum po dag thogs¹⁸⁾ pa med par **mthong ba** ni sha'i mig nyams shing **long bas kyang blta** bar 'dod pa / **thag ring** ba dpag tshad stong dag dang / **cha phra** ba rdul phran lta bu **dang / bsgribs pa'i don** gyi dngos po **yang** mig dang ldan pa bzhin du yang dag par **mthong bar 'gyur** ro //

智慧 (**mati**) すなわち智慧を本質とする眼 (jñānamayaṃ cakṣuḥ) を持ち、三界を妨げられることなく見る者は、肉眼が損なわれ盲目であっても、見たいと望んだ、1000 ヨーヅナの距離〔ほど〕遠く〔の対象〕・極微のように微細〔な対象〕・隠れた対象すなわち事物をも、眼を持つ者〔が対象を正しく見るの〕と同じように、正しく見る。

0.1.1.2. 説明 (2)

[D53b7–54a1, P57a7, C53b7, N53b6, G73b3–4]

gzhan yang /

MHK 3.3 [MD3b6–7, MP4a6–7, MC3b6–7, MN5a3, MG5a4, TD53b7–54a1, TP57a7, TC53b7, TN53b6, TG73b3–4]
mig stong pa yang blo med na //
mig dang ldan pa ma yin te //
mtho ris dang ni byang grol gyi //
lam dang lam min mi mthong phyir //

さらにまた、

〔インドラ神は、〕千の眼があっても、智慧 (**buddhi**) を欠くので、眼のない者である。なぜなら〔智慧を欠く者は〕天界 (**svarga**) と解脱 (**apavarga**) への正しい道と正しくない道とを正しく見極めないからである。

[D54a1–3, P57a7–b1, C53b7–54a2, N53b6–54a1, G73b4–6]

mig stong pa ni lha'i dbang po yin zhes grags te / de ni yul la re ba'i zhags pas blo gros yongs su dkris pas gal te shes pa'i mig gi **blo med na mig dang ldan pa ma yin te** / de ci'i phyir zhe na / **mtho ris dang byang grol gyi lam dang lam**¹⁹⁾ **ma yin** pa yang dag pa ji lta ba bzhin du **mi mthong ba'i phyir** ro // de la mtho ris kyi lam ni dge ba bcu'o // byang grol gyi lam ni 'phags pa'i lam yan lag brgyad pa'o //

¹⁸⁾thogs D, C; thog P, N, G.

¹⁹⁾lam D, P, N, G; las C.

千の眼を持つ者とはインドラ神であると良く知られている。彼（インドラ神）は、対象に対する欲望という縄で知が雁字搦めにされているから、智慧 (**buddhi**) すなわち智慧を本質とする眼 (*jñānamayaṃ cakṣuḥ*) を欠くので⁽⁷⁾、眼のない者である。【問】それはなぜか。【答】天界と解脱への道と道ならざるものとを、正しくすなわちあるがままに見ないからである。それらのうち、天界への道とは十善〔業道〕である。解脱への道とは八聖道である。

0.1.2. 智慧を本質とする眼を持つ者の行い

[D54a3, P57b1–2, C54a2–3, N54a1–2, G73b6–74a1]

gang gis na mig dang ldan par 'gyur ba'i shes pa de gang zhe na / de'i phyir /

MHK 3.4 [MD3b7, MP4a7, MC3b7, MN5a3–4, MG5a4–5, TD54a3, TP57b1–2, TC54a2, TN54a1, TG73b6–74a1]

shes rab mig bye²⁰⁾ mthong ba dang //

ma mthong khyad par 'dod pa yi //

'bras bu re ba dug tsher gyi //

sbyin pa sogs la 'jug mi byed //

ces bya ba smras te /

【問】それによって〔その人を真に〕眼を持つ者にするような智慧とは何か。【答】それに関して、〔バーヴィヴェーカは、〕

智慧によって開かれた眼を持つ者 (**prajñonmīlitalocana**) は、〔現世で〕経験される果報・〔現世では〕経験されない果報・すぐれた果報・望ましい果報への望みという毒や棘を有する布施等に向けて活動を起こさない。

と述べる。

[D54a3–6, P57b2–5, C54a3–5, N54a2–4, G74a1–4]

shes rab kyi mig bye ba ni mthong ba'i 'bras bu zhes bya ba 'bras bu thob pa dag dang lan byed pa dag la byin na 'di nyid la 'bras bu thob pa dang / ma mthong ba'i 'bras bu zhes bya ba 'jig rten pha rol dang / khyad par gyi 'bras bu zhes bya ba 'khor los sgyur ba dang brgya byin nyid la sogs pa dang²¹⁾ / 'dod pa'i 'bras bu zhes bya ba skye gnas ngan pa na yang yul la longs

²⁰⁾bye MD, MP, MC, MN, MG (shes rab kyi mig bye ba ... TJ); phyre TD, TP, TC, TN, TG.

²¹⁾dang D, C; n.e. P, N, G.

⁽⁷⁾gal te shes pa'i mig gi blo med na をそのまま翻訳すれば「もし智慧すなわち智慧を本質とする眼を欠くならば」となるが、内容を考慮して条件ではなく理由の意味で翻訳した。

spyod pa'i bdag nyid du 'ong ba ste / de dag lta bu'i 'bras bu la **re ba nyid dug** yin te / grol ba'i
 lus kyi bar chad byed pa'i phyir ro // de nyid **tsher** ma yin te / 'khor ba'i sdug bsngal gyis gnod
 par 'gyur ba'i phyir ro // de lta bu'i **sbyin pa** dang tshul khrim la **sogs pa la 'jug** par **mi byed** do
 //

智慧によって開かれた眼を持つ者 (*prajñonmīlitalocana*)⁽⁸⁾ は〔果報への望みという毒や棘を有する布施等に向けて活動を起こさない〕。〔現世で〕経験される果報 (*drṣṭaphala*) とは、果を獲得した者たち⁽⁹⁾ や返報する者たちに布施をする場合に、まさにこの世で獲得される果報である。〔現世では〕経験されない果報 (*adrṣṭaphala*) とは、来世〔の果報〕である。すぐれた果報 (*viśiṣṭaphala*) とは、転輪聖王やインドラ等〔に生まれること〕である。望ましい果報 (*iṣṭaphala*) とは、悪い母胎に〔生まれて〕も対象の享受を本性とする者になることである⁽¹⁰⁾。そのような果報への望みこそが毒である。なぜなら解脱身〔の獲得〕を妨害するからである。まさにそれ(果報への望み)は棘である。なぜなら〔果報への望みがもたらす〕輪廻という苦しみによって傷つくことになるからである。〔智慧によって眼が開かれた者は〕そのような布施や持戒等に向けて活動を起こさない。

[D54a6–7, P57b5–6, C54a5–6, N54a4–5, G74a4]

'o na ji lta bu zhig la brtson²²⁾ par byed ce na /

MHK 3.5 [MD3b7–4a1, MP4a8, MC3b7–4a1, MN5a4, MG5a5–6, TD54a6–7, TP57b5–6, TC54a5–6, TN54a4–5, TG74a4]

snying rjes²³⁾ thams cad mkhyen pa'i phyir²⁴⁾ //

'khor gsum yongs su dag pa yi //

sbyin la sogs la brtson²⁵⁾ byed cing //

de la'ang yid ni gnas mi byed //

ces bya ba ste /

²²⁾brtson D, C, N; rtson P, G.

²³⁾rjes MD, MP, MC, MN, MG, TD, TC; rje TP, TN, TG.

²⁴⁾phyir MD, MP, MC, MN, MG, TD, TC; phyir ro TP, TN, TG.

²⁵⁾brtson MD, MC, TD, TP, TC, TN, TG; rtson MP, MN, MG.

⁽⁸⁾注(6)で述べたように、チベット語をそのまま翻訳すれば「智慧という開かれた眼を持つ者」あるいは「智慧という眼が開かれた者」となる。しかし以下では、同注で示した *prajñonmīlitalocana* 理解に従って「智慧によって開かれた眼を持つ者」と翻訳する。

⁽⁹⁾具体的には、預流果を獲得した者と阿羅漢果を獲得した者のことである。アビダルマにおいて、この両者に対する行為は現世でその果報の享受をもたらすとされる。AKBh 232.16–233.3 (ad AK 4.56)等を参照。

⁽¹⁰⁾転輪聖王やインドラ等に生まれなくても、対象の享受ができる者として生まれるならば、それは「望ましい果報」ということであろう。

【問】それでは〔智慧によって眼が開かれた者は〕いかなるものに対して努力するのか。【答】〔それに対して、バーヴィヴェーカは、〕

〔智慧によって眼が開かれた者は、〕あわれみ故に、一切智者性〔の獲得〕のために三輪清浄なる布施等に対して努力する。しかもそれ（一切智者性）にも心はとどまらない。

と〔述べる〕。

[D54a7–b4, P57b6–58a3, C54a6–b3, N54a5–b2, G74a5–b4]

snying rjes grags pa dang bde ba dang 'gran pa la sogs pa'i phyir ma yin par **thams cad mkhyen pa** nyid kho na la gcig tu dmigs nas de thob par bya ba'i **phyir 'khor gsum yongs su dag pa'i sbyin pa la sogs pa la**²⁶⁾ **brtson par byed do** //

'khor gsum ni 'khor²⁷⁾ gsum po dag go // yongs su dag pa ni dri ma med pa ste / lus kyi mi dge ba rnam pa gsum dang / ngag gi rnam pa bzhi dang / yid kyi rnam pa gsum po de dag dang bral zhing dri ma med pa'i sbyin pa la sogs pa la²⁸⁾ brtson par byed pa'o // yang na sbyin pa dang sbyin pa po dang / len pa la sogs pa mi dmigs pas stong pa nyid kyi²⁹⁾ rjes su song ba'i 'khor gsum yongs su dag pa dang / 'jig³⁰⁾ tshogs la lta ba dang / log par lta ba dang / mthar 'dzin par lta ba dang bral bas mtshan ma med pa'i rjes su 'brang ba'i 'khor gsum yongs su dag pa dang / 'dod pa dang / gzugs dang gzugs med pa'i khams mngon par mi 'dod pas smon pa med pa'i sngon du 'gro ba'i 'khor gsum³¹⁾ yongs su dag pa'o //

de la'ang yid ni gnas mi byed // ces bya ba ni thams cad mkhyen pa nyid de la yang chags pa med pa ste / de ltar yang ji skad du / de la byang chub sems dpa'i 'dod pa chung ba nyid gang zhe na / gang byang chub kyang mi 'dod pa nyid do zhes gsungs pa lta bu'o //

〔智慧によって眼が開かれた者は、〕あわれみ故に、すなわち名声や快樂や競争等のためではなく、一切智者性のみをただひたすらに志向してそれを獲得するために、三輪清浄なる布施等に対して努力する。

【三輪清浄：第一解釈】三輪とは三つの輪である。清浄とは無垢である。〔すなわち「三輪清浄なる布施等に対して努力する」とは、〕身の三種の不善・口の四種の不善・意の三種の不善を離れて、無垢なる布施等に対して努力する〔ということである〕⁽¹¹⁾。【第二解釈】あるいは

²⁶⁾la D, C; n.e. P, N, G.

²⁷⁾'khor D, P, C, G; 'khor ni N.

²⁸⁾la D, C; n.e. P, N, G.

²⁹⁾kyi D, C; kyis P, N, G.

³⁰⁾'jig D, C; 'jigs P, N, G.

³¹⁾gsum P, N, G; gsum po D, C.

⁽¹¹⁾三輪清浄の第一解釈として、十善業道と関連つけた解釈が示されている。Heitmann 2004: 89, fn. 3 が指摘するように、同様の三輪清浄の説明が『二万五千頌般若経』に見られる。『二万五千頌般若経』(Kimura 2009: 98.28–

また、〔三輪清淨とは、〕施物・施者・受者等を認識しないことによる、空性に随順する三輪清淨と、有身見・邪見・辺執見を離れることによる、無相に随順する三輪清淨と、欲界・色界・無色界を切望しないことによる、無願に基づく三輪清淨とである⁽¹²⁾。

「しかもそれ(一切智者性)にも心はとどまらない」とは、その一切智者性にも執着しないということである。そしてそのことは「【問】それらのうち、菩薩の少欲性('dod pa chung ba nyid, *alpecchatā)とは何か。【答】それは菩提さえも望まないことである」⁽¹³⁾と〔世尊が〕仰っている通りである。

略号と参考文献(本文中に既に提示したものを除く)

AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu): Prahlad Pradhan, ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu). See AK.

T 『大正新脩大蔵経』

Kimura, Takayasu

2009 *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā I-2*. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing.

Miyazaki, Izumi (宮崎 泉)

2007 『『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳注』『京都大学文学部研究紀要』46: 1-126.

30) : tatra katamā bodhisattvasya mahāsattvasya trimaṇḍalapariśuddhiḥ? yad uta daśakuśalākarmapathapariśuddhir evaṃ bodhisattvasya mahāsattvasya trimaṇḍalapariśuddhiḥ.; 『摩訶般若波羅蜜經』T8.259a14-15: 云何菩薩三分清淨。十善道具足故。(Cf. 『大智度論』T25.417b15-21: 三分清淨者。所謂十善道身三口四意三。是名三分。上以說三解脱門故。此中不復說。三分清淨者。或有人身業清淨口業不清淨。口業清淨身業不清淨。或身口業清淨意業不清淨。或有世間三業清淨。而未能離著。是菩薩三業清淨及離著故。是名三分清淨。)

⁽¹²⁾三輪清淨の第二解釈として、空・無相・無願の三解脱門と関連づけた解釈が示されている。このうち、「空性に随順する三輪清淨」(施物・施者・受者等を認識しないこと)は最も一般的な三輪清淨解釈であろう。しかし「無相に随順する三輪清淨」と「無願に基づく三輪清淨」については、残念ながら現時点で他文献での用例を確認できていない。また、前注に引用した『大智度論』に「上以說三解脱門故。此中不復說」(T25.417b16-17)とあるので、これに先行する箇所では三解脱門と関連づけた三輪清淨解釈が示されていることが予想されるが、現時点で当該箇所を見つけれない。なお『大乘掌珍論』では、「施物・施者・受者」あるいは「施者・受者・施果」を把握しないという、二種の三輪清淨解釈が示されている。これは「空性に随順する三輪清淨」をさらに分類したものであろう。『大乘掌珍論』T30.273a28-b1: 不取一切施物施者及受者故。不取一切施者受者及施果故。二種三輪皆得清淨。

⁽¹³⁾『中観心論』と『思釈炎』のチベット語訳者でもあるアティシャ(Atiśa, 982-1054)の『中観優波提舍開宝篋』(Ratnakaraṇḍoghāta-nāma-madhyamakopadeśa)に同文の引用がなされている。そこでは『法集経』(Chos yang dag par bsdud pa, Dharmasamgiti[sūtra])からの引用とされるが、現時点では同定できていない。『中観優波提舍開宝篋』(宮崎 2007: 8.10-12) : 'phags pa chos yang dag par bsdud pa las kyang / de la byang chub sems dpa' 'dod pa chung ba gang zhe na / gang byang chub kyang mi 'dod pa'o // ...

また Heitmann 2004: 91, fn. 2 が指摘するように、ほぼ同じ表現が『二万五千頌般若経』に見られる。Heitmann は Dutt ed. を提示するが、以下では Kimura ed. と漢訳(鳩摩羅什訳)を提示しよう。『二万五千頌般若経』(Kimura 2009: 94.19-21) : tatra katamā bodhisattvasya mahāsattvasyālpecchatā? yad bodhisattvo mahāsattvo bodhim api necchati, iyaṃ bodhisattvasya mahāsattvasyālpecchatā.; 『摩訶般若波羅蜜經』T8.258b6-7: 云何菩薩少欲。乃至阿耨多羅三藐三菩提尚不欲何況餘欲。是名少欲。

Saitō, Akira (斎藤 明)

2005 「『中観心論』の書名と成立をめぐる諸問題」『印度学仏教学研究』53-2: 167–173.

Ye, Shaoyong

2009 “A Preliminary Survey of Sanskrit Manuscripts of Madhyamaka Texts Preserved in the Tibet Autonomous Region.” In *Sanskrit Manuscripts in China. Proceedings of a Panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies, October 13 to 17*, ed. E. Steinkellner et al., 307–336. Beijing: China Tibetology Publishing House.

A Study of the Third Chapter of the *Madhyamakahrdayakārikā* (1)

Summary

The aim of this paper is to present a critical edition and an annotated Japanese translation of the third chapter of the *Madhyamakahrdayakārikā* and its commentary, the *Tarkajvālā*, which is entitled “Seeking the Knowledge of Reality” (*Tattvajñānaiṣaṇā*). At the beginning of this chapter (vv. 1–13), Bhāviveka makes an introductory argument about the knowledge of reality (*tattvajñāna*). The following is a synopsis of the first half of this argument (vv. 1–5) studied in this paper.

Chapter 3: Seeking the Knowledge of Reality (*Tattvajñānaiṣaṇā*)

0. Introduction: On intellect (*prajñā*)

0.1. Importance of intellect

0.1.1. The one who has the eyes of intellect has the eyes in the true sense [v. 1]

0.1.1.1. Explanation (1) [v. 2]

0.1.1.2. Explanation (2) [v. 3]

0.1.2. The practice of the one who has the eyes of intellect [vv. 4–5]

〈キーワード〉 バーヴェィヴェーカ、中観心論、思釈炎、真実知、智慧